

安吉遺跡発掘調査報告

—町道本田土合線拡幅改良工事に係る第3次発掘調査報告—

1999年3月
大門町教育委員会

序

豊かな自然に囲まれた大門町には、南方に連なる丘陵地を中心として数々の遺跡が存在することが知られています。また、近年の発掘調査から平野部にもたくさんの遺跡が確認されています。これらの遺跡は郷土の歴史を知るうえで貴重な資料となるものです。

しかし、近年の大型開発の増加に伴い、かけがえのない文化遺産が次々に消滅しつつあります。そういう情勢の中で、この安吉遺跡も町道の拡幅によってその一部が失われることになりました。

この報告書は、工事に先立って先人達が残してくれたその文化遺産を記録保存し、まとめたものであります。

本書が多くの人々に活用され、地域の文化財保護意識の高揚と啓蒙に支えの一つとなれば幸いです。

終わりに、調査にあたつてご指導、ご協力を頂いた富山県埋蔵文化財センター、及び地元関係各位に厚く御礼申し上げます。

平成11年3月

大門町教育委員会

教育長 野上 和雄

例　　言

- 1 本書は、富山県射水郡大門町に所在する安吉遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 調査は、町道本田土合線拡幅改良工事に伴う本調査である。
- 3 調査期間は1998年10月16日～12月25日（実働36日）、調査面積は1,493m²である。
- 4 調査は、富山県埋蔵文化財センターの指導・協力を得て大門町教育委員会が実施した。調査は大門町教育委員会 学芸員 尾野寺 克実が担当した。
- 5 本書の編集・執筆は、大門町教育委員会 学芸員 尾野寺 克実が行った。
- 6 調査から本書の作成に至るまで、下記の方々から有益な御教示を得た。記して感謝の意を表す。
宇野隆夫・久々忠義・前川要・宮田明（敬称略）
- 7 発掘調査の作業には（社）大門町シルバー人材センターの御協力を得た。
- 8 遺物整理、報告書作成作業の参加者は次のとおりである。
中谷正和・荒木慎也・高橋康生・八巻謙治・小栗由希代・山本敦幸・瓜生日奈子
- 9 凡　例

地　山 

煤付着 

本文目次

挿図目次

I 序章.....	1	第1図 位置と周辺の遺跡.....	1
1. 遺跡の位置と環境.....	1	第2図 調査区割付図.....	2
II 調査に至る経緯と経過.....	2	第3図 安吉遺跡基本層序.....	3
1. 調査に至る経緯.....	2	第4図 遺構全体図及び主要遺構断面図（1）.....	4
2. 調査の経過.....	2	第5図 遺構全体図及び主要遺構断面図（2）.....	7
III 調査.....	3	第6図 出土遺物（1）.....	8
1. 層序.....	3	第7図 出土遺物（2）.....	10
2. 遺構.....	3	第8図 出土遺物（3）.....	11
第1トレンチ.....	3		
第2トレンチ.....	3		
第3トレンチ.....	5	参考文献	
第4トレンチ.....	5	写真図版	
第5トレンチ.....	5		
第6トレンチ.....	6		
3. 遺物.....	6		
IV まとめ.....	12		

I 序 章

1. 遺跡の位置と環境（第1図）

大門町は、富山県の中央北部、射水平野の南西端に位置し、東は小杉町、西・南は庄川を挟んで高岡市、北は大島町に接している。地形的には庄川右岸と南北に貫流する和田川の扇状地が大部分を占め、南方には丘陵地が連なる。

今回、発掘調査を行った安吉遺跡は小杉町を中心として広がる射水平野の西端部に位置し、標高6.4m～6.8mの高さにある。周辺には縄文時代～中世の遺跡が密に分布する。特に弥生後期、奈良・平安時代に中心をもつ遺跡が頗著に見られる。

東神楽川が安吉遺跡を南から北へ囲むように流れ放生津に繋がり、旧北陸道が遺跡の北を東西に走っていたとのことである。非常に交通の便に優れ、興味深い。

また近年、発掘調査件数の増加と共にその調査で得た資料を蓄積しつつある。安吉遺跡では中世（鎌倉時代）に属する遺構・遺物を多く検出している。しかし、大門町東部・大島町南部のほとんどの遺跡では中世遺物の散布を良く見るが、遺構を確認できているのは外に本田宮田遺跡・本田畠田遺跡のみでそれも少数であり、安吉遺跡は当地域の中世を考えるに当たって重要な地点であると考えられる。



第1図 位置と周辺の遺跡 (S=1/20,000)

- 1.二口油免、2.二口五反田、3.二口、4.安吉、5.本田天水、6.本江畠田工、7.本江大坪工、8.棚田
9.本田杉田、10.本江畠田Ⅱ、11.本江大坪Ⅱ、12.本田宮田、13.本田畠田、14.本江宮田

II 調査に至る経緯と経過

1. 調査に至る経緯

大門町は、町道本田土合線の道路改良工事を計画、実施した。改良工事は幅員5~6mを拡幅し、新たに歩道を設けて幅員15mにするものである。

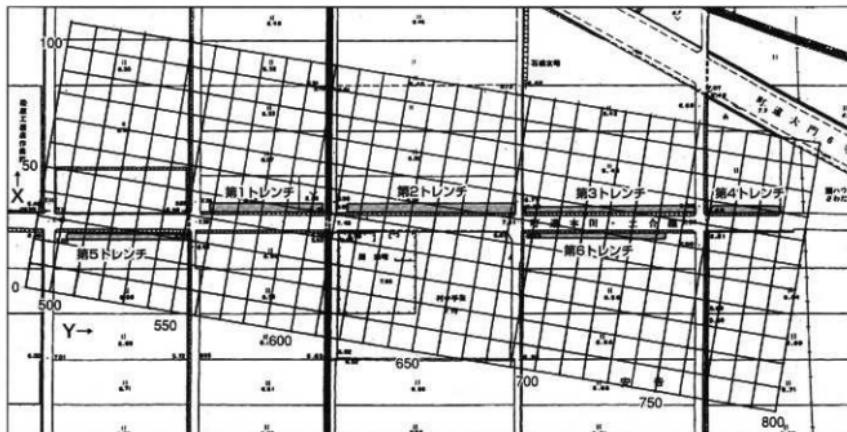
当路線計画地は、富山県農林水産部高岡農地林務事務所が平成4年度から平成8年度まで行った大門東部地区整備事業対象地に含まれる。町教育委員会では、整備事業に先立ち、富山県埋蔵文化財センターの協力を得て、試掘調査を実施してきた。確認した埋蔵文化財包蔵地は、遺構面及び、遺物包含層を傷つけないように計画変更を高岡農地林務事務所に求め、その理解を得て保護してきた。

しかし、町道拡幅部分に、その試掘調査時に確認した埋蔵文化財包蔵地が存在するため、町教育委員会は、町建設課・県教育委員会の3者でその取扱について協議し、工事に先立って年次的に本調査を実施していくことになった。今回調査はその第3次調査である。

2. 調査の経過（第2図）

平成8年度の第1次調査時に、任意で10×10mのグリッドを組んだ。第2次調査同様、今回調査でもそれを拡大使用し、南北方向にX20~90、東西方向にY490~790を設定した。

調査対象地は農地、及び町道本田土合線で分割されているため、第2図のとおり第1地区～第6地区とした。総発掘面積は1,493m²である。10月16日、重機による表土掘削開始。しかし、第5地区と第6地区で農作物の刈り取りが終了していなかったため、その部分については後日行うこととした。10月19日より作業員が参入する。第1地区から順に遺構検出、遺構掘削を行う。掘削作業に合わせて記録作業を進める。第1～第4地区までの記録作業終了後、12月7日より第5・6地区の表土を重機によって掘削する。調査期間は10月16日～12月25日（実働36日間）である。



第2図 調査区割付図 (S=1/2,000)

III 調査の概要

1. 層序 (第3図)

基本層序は表層から、1層耕作土、2層床土、3層黒褐色粘質土、4層黄灰色粘質土、5層青灰色砂土となる。1層は層厚0~45cmを測る。2層は層厚0~28cmを測る。遺存していない箇所は平成6年度に行われた県営ほ場整備事業で田面調整を行った際に削られたものである。3層は層厚0~9cmを測る。中世の遺物包含層である。ほとんどが削平を受けており、遺存している箇所は少ない。4層は地山で、中近世の遺構検出面である。5層は涌水点である。

2. 遺構

調査区全体で、中世の遺構を多く検出した。溝は南から北へ流れるものがほとんどで、外に井戸・土坑・穴を確認した。穴は建物の柱穴として認められるものは確認していない。遺構の覆土は4種類であるが、ほとんどは暗褐色粘質土が入る。その他には黒褐色粘質土、淡黒色粘質土、及び灰褐色粘質土が見られた。削平を受けているためか全体に深度の浅いものが多い。

第1・第2・第5トレチでは遺構密度が濃く、東側に行くにつれ、薄くなっていく傾向にある。

以下、トレチごとに遺構の概要を記す。

第1トレチ (第4図上段)

SD 1 トレチ西端～Y555で検出した溝。トレチの端に一部がかかつているのみで、幅は不明。最大深度は34cmを測る。

SD 2 Y555～565の間で検出した溝。幅338cm、最大深度は47cmを測る。遺物は中世土師皿が出土している。

SD 3 Y560～565の間で検出した溝。X45、Y565付近でSD 5と合流する。幅378cm、最大深度は54cmを測る。遺物は中世土師皿が出土している。

SD 4 Y565～575の間で検出した溝。X45、Y565付近でSD 5に切られている。北東方向へ流れる。幅26cm、最大深度は7cmを測る。遺物は珠洲焼が出土している。

SD 5 Y565～585の間で検出した溝。東西に流れる流路である。X45、Y565付近でSD 3と合流する。最大深度は19cmを測る。

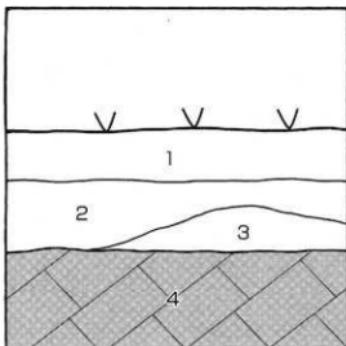
SD 6 Y590～トレチ東端で検出した溝。トレチの端に一部がかかつているのみであり、幅は不明。最大深度は33cmを測る。

SK 1 トレチ南端～X40、Y550～555の間で検出した方形と考えられる土坑。トレチの端に一部がかかつっているのみである。検出最大幅は119cm、最大深度は22cmを測る。

SK 2 トレチ北端～X45、Y570～580の間で検出した土坑。トレチの端に一部がかかつているのみである。検出最大幅は176cm、最大深度は9cmを測る。遺物は珠洲焼が出土している。

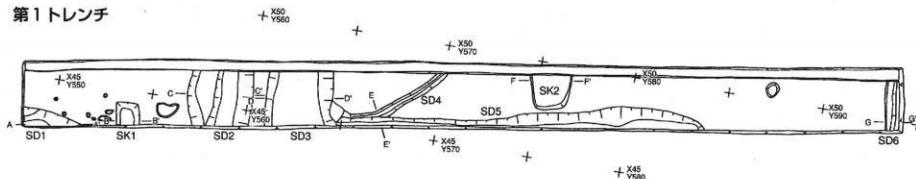
第2トレチ (第4図中段)

SE 1 X55～60、Y625～630の間で検出した不正円形を呈す素掘りの井戸。断面形は台形を呈している。最大幅は101cm、最大深度は47cmを測る。覆土は黒褐色粘質土が入る。完形の中世土師皿と円形の木板が出土している。

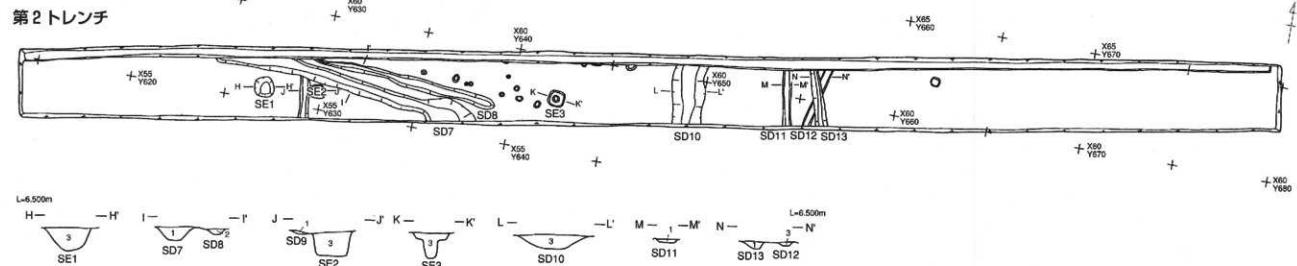


第3図 安吉遺跡基本層序

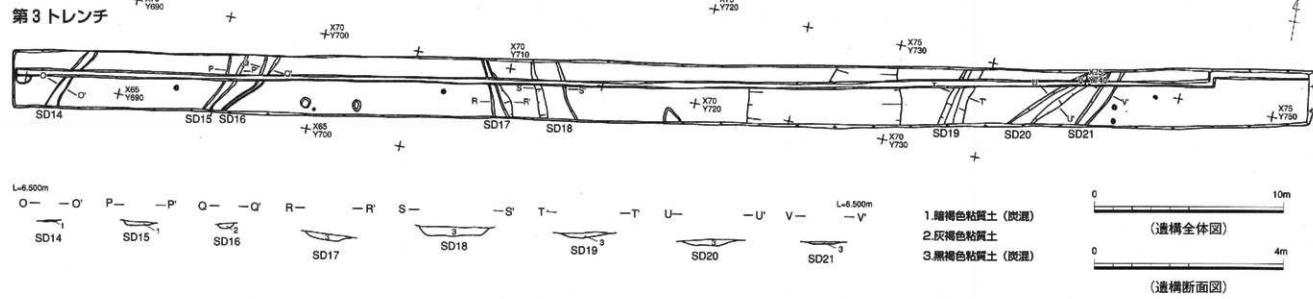
第1トレーニング



第2トレーニング



第3トレーニング



第4図 造構全体図及び主要造構断面図（1）

SE2 X55~60, Y625~630の間で検出した不正方形を呈す素掘りの井戸。断面形は長方形を呈している。最大幅は72cm、最大深度は50cmを測る。覆土は黒褐色粘質土が入る。

SE3 X55~60, Y640~645の間で検出した方形を呈す素掘りの井戸。最大幅は78cm、最大深度は53cmを測る。二段掘り方で、二段目は径32cmの円形を呈す。覆土は黒褐色粘質土が入る。

SD7 Y620~640の間で検出した溝。北西方向へ流れる。幅82cm、最大深度は30cmを測る。

SD8 Y620~640の間で検出した溝。SD7に沿って北西方向へ流れる。幅38cm、最大深度は13cmを測る。覆土は灰褐色粘質土が入る。出土遺物から近世のものと思われる。

SD9 Y625~630の間で検出した溝。SD7に切られている。幅36cm、最大深度は6cmを測る。

SD10 Y645~650の間で検出した溝。幅155cm、最大深度は39cmを測る。

SD11 Y650~655の間で検出した溝。幅44cm、最大深度は7cmを測る。

SD12 Y655~660の間で検出した溝。SD13に切られている。覆土は黒褐色粘質土が入る。幅32cm、最大深度は7cmを測る。

SD13 Y655~660の間で検出した溝。SD12を切っている。覆土は暗褐色粘質土が入る。幅45cm、最大深度は15cmを測る。

第3トレチ（第4図下段）

SD14 Y685~690の間で検出した溝。北東方向へ流れる。幅40cm、最大深度は4cmを測る。遺物は中世土師皿、中国製陶器が出土している。

SD15 Y695上で検出した溝。北東方向へ流れる。幅66cm、最大深度は9cmを測る。

SD16 Y695~700の間で検出した溝。北東方向へ流れる。覆土は黒褐色粘質土が入る。幅34cm、最大深度は11cmを測る。

SD17 Y705~710の間で検出した溝。覆土は黒褐色粘質土が入る。幅100cm、最大深度は24cmを測る。

SD18 Y710~715の間で検出した溝。覆土は黒褐色粘質土が入る。幅149cm、最大深度は20cmを測る。

SD19 Y730~735の間で検出した溝。北東方向へ流れる。覆土は黒褐色粘質土が入る。幅107cm、最大深度は11cmを測る。

SD20 Y735~745の間で検出した溝。流れは北東方向に強く掘れる。覆土は黒褐色粘質土が入る。幅109cm、最大深度は14cmを測る。

SD21 Y740~745の間で検出した溝。北東方向へ流れる。覆土は黒褐色粘質土が入る。幅83cm、最大深度は5cmを測る。

第4トレチ（第5図上段）

このトレチでは穴を11基確認しているのみである。それらも柱穴になる可能性は低い。

第5トレチ（第5図中段）

SD22 トレチ西端～Y505で検出した溝。トレチの端に一部がかかっているのであり、幅は不明。最大深度は238cmを測る。覆土は灰褐色粘質土が入る。遺物は珠洲焼が出土している。

SD23 Y520上で検出した溝。幅は303cm、最大深度は54cmを測る。覆土は下層に地山ブロックを含んだ淡黒色粘質土が入り、人为的に埋め戻されたことを示す。上層は暗褐色粘質土が入るが、SD23単独のものではなく、SD24上まで及んでいる。SD23・24の下層が埋め戻された後に自然堆積したものである。遺物は上層より、中世土師皿、珠洲焼、白磁、瀬戸焼、石製品が出土している。

SD24 Y520～525の間で検出した溝。幅は76cm、最大深度は24cmを測る。覆土は地山ブロックを含んだ淡黒色粘質土が入り、人為的に埋め戻されたことを示す。上層はS D23のものと同一で暗褐色粘質土が入る。

SD25 Y525～530の間で検出した溝。幅は208cm、最大深度は6cmを測る。

SD26 Y540～545の間で検出した溝。幅は144cm、最大深度は77cmを測る。遺物は珠洲焼が出土している。

SD27 Y540～550の間で検出した流路。幅は538cm、深度は約380cmを測る。覆土は上から暗褐色粘質土が約100cm、暗灰色粘質土が約80cm、淡黒色粘質土が約200cm堆積する。この内、暗褐色粘質土からのみ遺物が出土する。底部にヘドロが蓄積したのだろうか。淡黒色粘質土は植物遺体が腐った状態で混入し、よどんだ状態であったことを示している。遺物は中世土師皿、珠洲焼、瀬戸焼、石製品が出土している。

SK1 トレンチ南端～X25、Y510～515の間で検出した方形と考えられる土坑。検出最大幅は92cm、最大深度は9cmを測る。

SK2 トレンチ南端～X30、Y535上で検出した方形と考えられる土坑。検出最大幅は110cm、最大深度は5cmを測る。

SP1 X25～30、Y525上で検出した梢円形を呈す穴。最大幅は46cm、最大深度は11cmを測る。遺物は珠洲焼が出土している。

第6トレンチ（第5図下段）

SD28 Y690～695の間で検出した溝。北東方向へ流れる。覆土は黒灰色粘質土が入る。第3トレンチのS D16とは同一遺構と考えられる。幅は46cm、最大深度は24cmを測る。

SD29 Y695～700の間で検出した溝。北東方向へ流れる。幅は50cm、最大深度は4cmを測る。

SD30 Y710～715の間で検出した溝。覆土は黒灰色粘質土が入る。第3トレンチのS D17とは同一遺構と考えられる。幅は168cm、最大深度は32cmを測る。

SD31 X55～60、Y715～720の間で検出した溝。幅は62cm、最大深度は19cmを測る。

SD32 Y730上で検出した溝。幅は69cm、最大深度は6cmを測る。北東方向へ流れる。覆土は黒灰色粘質土が入る。第3トレンチのS D19とは同一遺構と考えられる。遺物は団化できなかつたが、土師質土器片が出土している。

3. 遺物（第6～8図）

遺物は調査区全域で出土しているが、特に第1・第5トレンチに集中し、調査区東側は少なくなる傾向にある。

遺構内より出土したものを中心概観する。

SD2 1は中世土師皿である。口径8.0cmを測り、非クロコ成形である。2～4は珠洲焼である。2・4はすり鉢である。2は口径4.0cmを測り、口縁端部に水平な面を取つて、波状文を施す。3は甌で口縁部はくの字状に屈折して端部は円頭を呈す。体部外面は10条／3cmの叩きを施す。

この遺構の年代は15世紀前半に位置付けられると考えられる。

SD3 5は中世土師皿である。口径10.0cmを測り、非クロコ成形である。6・7は珠洲焼である。6は甌もしくは甌の体部で、外面に11条／3cmの叩きを施す。7はすり鉢である。底径14.0cmを測る。

この遺構の年代は15世紀前半に位置付けられると考えられる。

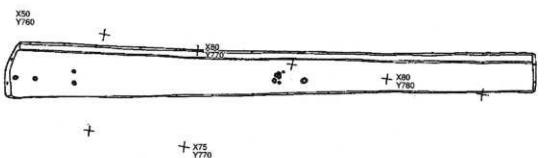
SD4 8・9は珠洲焼の甌もしくは甌の体部破片である。外面に8は10条／3cm、9は7条／3cmの叩きを施す。

SK2 10・11は珠洲焼の甌もしくは甌である。10の口縁部はくの字状に屈折して端部は円頭を呈し、11の外面には9条／3cmの叩きを施す。

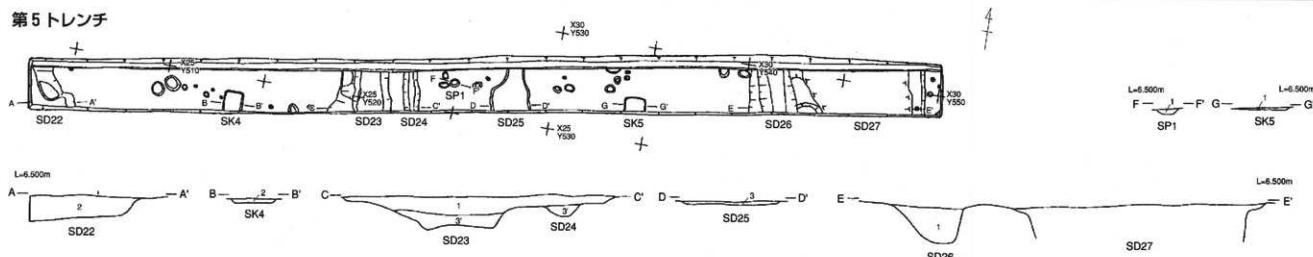
この遺構の年代は15世紀前半に位置付けられると考えられる。

SE1 12は中世土師皿である。不整形で平面形は梢円形を呈し、最大径は口径112cm、底径7.6cm、器高27cmを測り、非クロコ成形である。口縁端部には刻み目を有し、煤が付着している。13は木製の円形状の板である。最大径は20.0cmを測る。桶底と思われる。

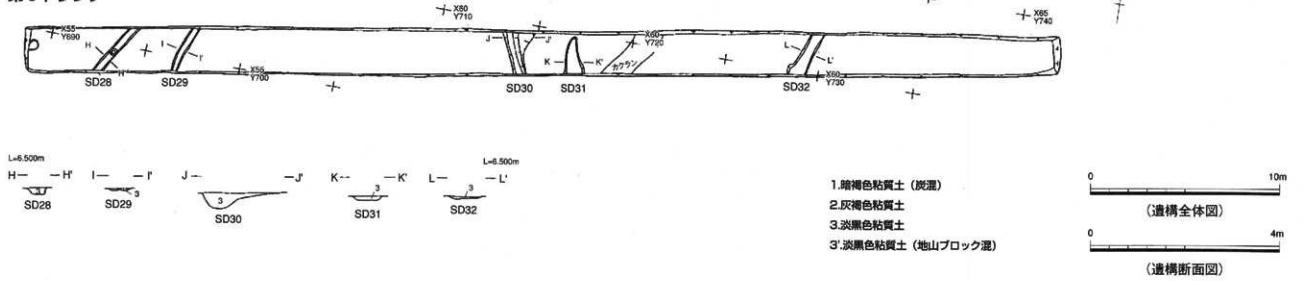
第4トレンチ



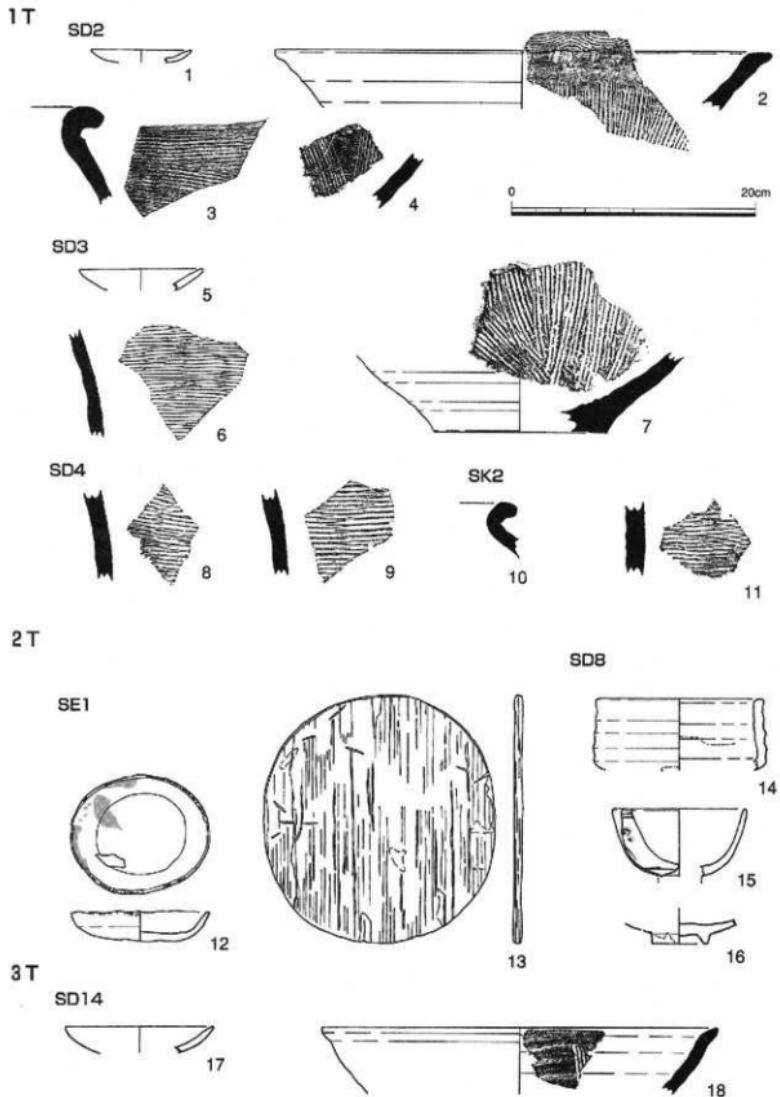
第5トレンチ



第6トレンチ



第5図 遺構全体図及び主要遺構断面図(2)



第6図 出土遺物(1)

この遺構の年代は14世紀後半に位置付けられると考えられる。

SD8 14は越中瀬戸焼の匣鉢と考える。口径13.0cmを測り、内外面に鉄釉を施す。15は伊万里焼の染付梶で、口径10.6cmを測る。16は唐津焼の皿である。底径4.5cmを測り、灰釉を施し、内底面には蛇の目釉剥ぎを行う。

この遺構の年代は16世紀に位置付けられると考えられる。

SD14 17は中世土師皿である。口径12.0cmを測り、非ロクロ成形である。18は珠洲焼のすり鉢である。口径32.0cmを測り、口縁部は外傾し水平な面を取る。

この遺構の年代は15世紀前半に位置付けられると考えられる。

SD22 19は珠洲焼の壺もしくは甕の体部破片である。外面に9条／3cmの叩きを施す。

SD23 20～23は非ロクロ成形の中世土師皿である。20は口径6.0cm、底径4.6cm、器高1.0cmを測る。21は口径7.0cm、底径3.6cm、器高1.8cmを測る。22は口径8.0cm、底径2.0cm、器高2.0cmを測る。23は口径10.0cmを測り、内面と口縁端部外面に煤が付着する。24は白磁の皿である。口径11.8cmを測る。25は瀬戸美濃焼の天目茶碗である。口径12.0cmを測り、内面と外外面上半部に鉄釉を施す。26～28は珠洲焼である。26はすり鉢の体部破片で内面に節目を残す。27・28は壺もしくは甕の体部破片で、外面に27は7条／3cm、28は9条／3cmの叩きを施す。29は珠洲焼と思われる陶器片で、破碎後に砾石として転用されたものである。最大長6.9cm、最大幅3.5cm、最大厚1.3cmを測る。

この遺構の年代は14世紀後半～15世紀前半に位置付けられると考えられる。

SD26 30は珠洲焼の壺もしくは甕の体部破片である。外面に8条／3cmの叩きを施す。

SD27 31～35は中世土師皿である。31・33・34は非ロクロ成形である。31は口径10.0cmを測る。33は口径11.0cmである。34は口径12.0cmを測り、口縁部外面に一段の横ナデを有し、端部は面取りを施す。32・35はロクロ成形である。32は口径13.0cmを測り、丁寧な回転ナデ調整を施す。35は口径12.0cmを測る。36は青磁碗である。口径18.0cmを測り、体部が丸みを持って立ち上がり、口縁部が外方に開いて端部を丸く收める。37～46は珠洲焼である。37は壺である。口径16.0cmを測り、短頭で口縁部は弧状に外反する。38・41は甕である。38は短頭でくの字状に屈折して短部は方頭を呈し、体部外面には8条／3cmの叩きを施す。SD27の東側肩部の地山に貼り付いた状態で出土した。41は口径38.0cmを測る。短頭でくの字状に深く屈折し、方頭を呈す。口縁端部上方を面取りする。39・40・42～45は壺もしくは甕の体部破片である。外面に39・43は11条／3cm、40は10条／3cm、42・44・45は9条／3cmの叩きを施す。45の外面には「九」の刻文を持つ。46はすり鉢で、口径27.0cmを測り、口縁部は外傾し、短部は方頭を呈す。

47は打製石斧である。最大長9.4cm、最大幅6.9cm、最大厚2.6cmを測り、基部は欠損している。本年度調査区より西に約150mの地点まで縄文時代晚期の集落遺跡である二口遺跡が存在し、当該地の人々の活動範囲がこの周辺にまで及んでいたと思われる。

この遺構の年代は14世紀後半～15世紀前半に位置付けられると考えられる。

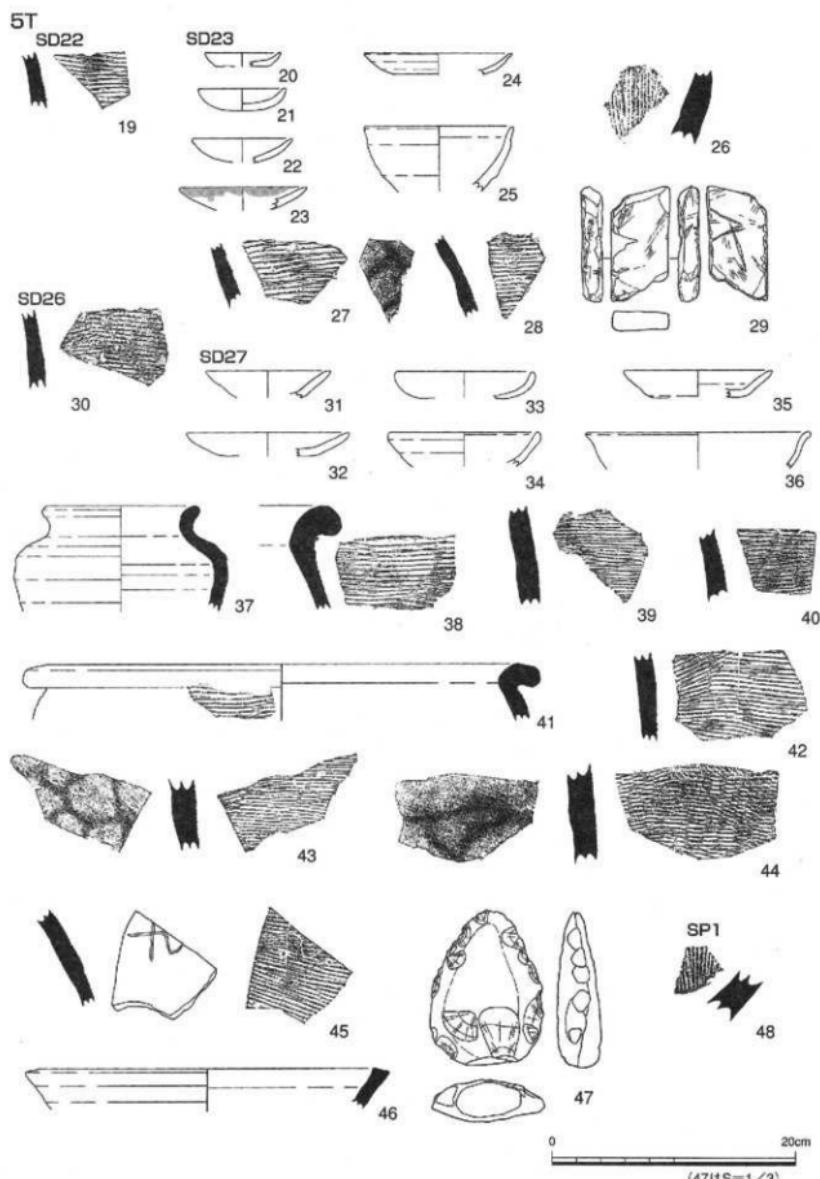
SP1 48は珠洲焼のすり鉢の体部破片である。

その他 耕作土や床上内からも様々な遺物が出土している。当該地の中世を考えるに当たって参考になる遺物も多々あるので、ここで紹介しておきたい。

49は弥生土器である。口径13.0cmを測る。

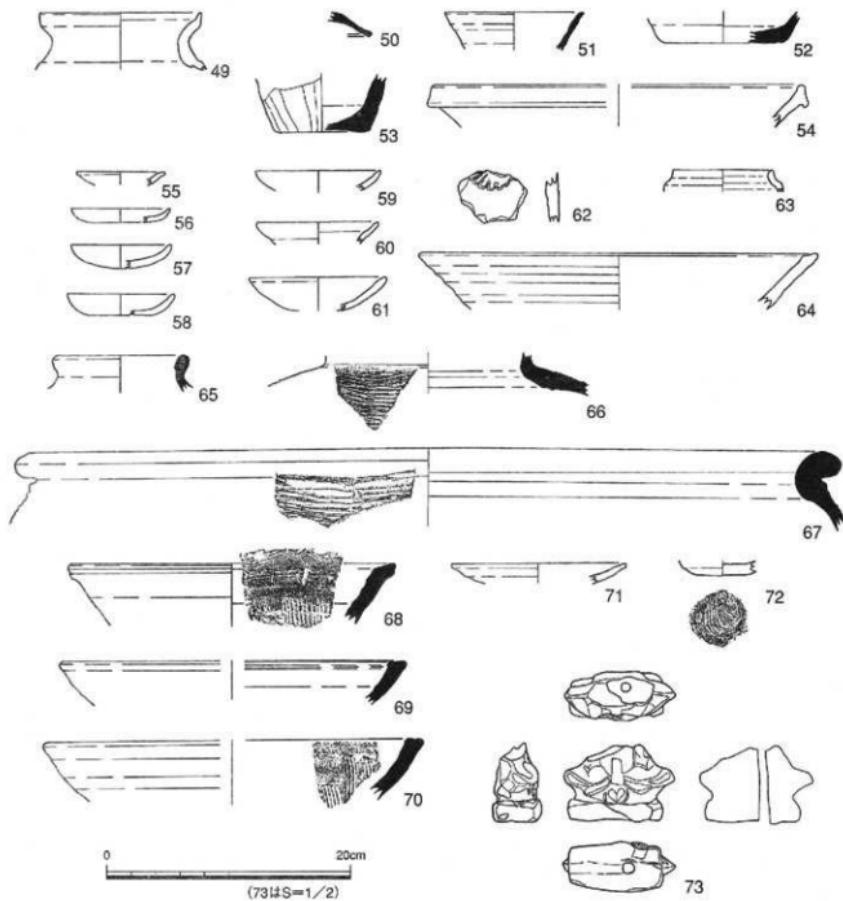
50～53は須恵器である。50は杯蓋である。口縁端部は巻き込んで丸い形状を呈す。51は杯の口縁部である。口径11.0cmを測り、口縁部は直線的に立ち上がる。52は無台杯の底盤である。底径は10.0cmを測る。53は壺の底部である。外面にケズリ調整を施す。54は土師質土器の鍋である。口径29.7cmを測り、口縁端部は強く面取りし肥厚する。

55～61は非ロクロ成形の中世土師皿である。口径は7.0～11.0cmを測る。14世紀後半～15世紀前半と考えられる。55は口縁部外面に一段の横ナデを有する。62は瓦質土器の火鉢の体部破片と考えられる。菊花文が施される。63・64は古瀬戸である。63は小壺である。口径8.0cmで、内外面に鉄釉が施される。15世紀のものと考えられる。64は盤である。口径32.4cmを測り、内外面に灰釉を施す。15世紀のものである。65～70は珠洲焼で、15世紀のものと考えられる。65は小型壺である。くの字状の口頭を付け、端部は丸く收める。66は甕の肩部である。体部外面には9条／3cmの叩きを施す。67は甕の口縁部である。口径64.0cmを測り、短頭でくの字状に屈折して、口縁端部は円頭を呈す。



第7図 出土遺物(2)

遺構外出土



第8図 出土遺物（3）

体部外面には6条／3cmの叩きを施す。68～70はずり鉢である。68は口径26.0cmを測り、口縁端部は肥厚した三角頭を呈し、波状文を持つ。69・70の口縁端部に水平な面を取り、口径については69は27.4cm、70は28.6cmを測る。

71・72は越中瀬戸焼である。71は皿で、口径17.0cmを測る。72は小壺の底部破片で、底径44cmを測り、外底面に回転糸切痕を残す。双方とも15世紀のものであろう。73の上製品は首部より上が欠損しているが、雄鶴と推測される。頂部から底部まで径0.4cmの穴を穿つ。近世のものである。

IV まとめ

今回の調査は道路の拡幅に起因するものであり、線的な削氷を実施するに止つた。そのため、残念ながら全ての遺構について性格は解明できていないが、今回の調査等で知り得たことを簡略書きにしてまとめに変えたい。

(1) 出土遺物より、安吉遺跡は14世紀後半～16世紀まで存続していた。

(2) 遺構の覆土は大別して暗褐色、黒褐色・淡黒色、灰褐色の3種に分けられる。出土遺物から、暗褐色を呈するものは14世紀後半、黒褐色・淡黒色は15世紀前半、灰褐色は16世紀に属する。

(3) 遺構内出土の遺物より、安吉遺跡は14世紀後半～15世紀前半を主として機能していた。中でも、15世紀前半に帰属する遺物が多く、その時期が全盛であったと考えられる。

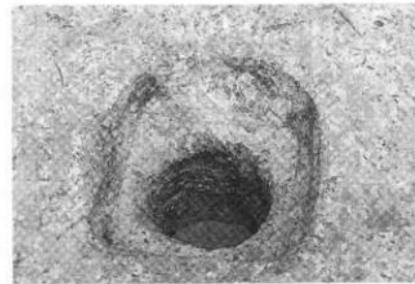
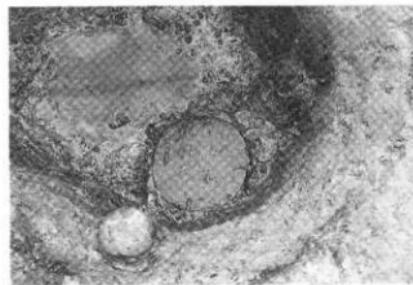
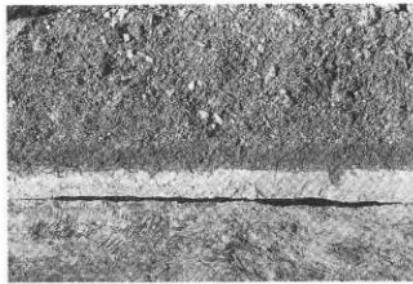
(4) SD27は軸員が538cm、深度が380cmと大きく、川跡と考えられるが、集落を南北に縱断している。当遺跡の南から東側を廻りこみながら北へ東神楽川が流れおり、その支流の一つと考えられるものである。積極的に活用していたとは言えないまでも、密接な関わりを持っていたことと考えられる。

(5) 東神楽川は江戸時代には放生津渓から大門町二口あたりまで帆掛け舟が通つたと云い伝えられている。ここで言う東神楽川は第1図で示した現在のものとは若干コースを変更しているであろうが、安吉遺跡は現在の二口地区の東部に位置している。(3)で述べたように東神楽川は安吉遺跡に近接して流れしており、中世においても水運として利用されていた可能性が充分に考えられる。また、旧北陸道が安吉遺跡の北側、大島町南部を東西に走つていたとされている。

以上のように、安吉遺跡は交通上では非常に恵まれた立地条件を持ち、14世紀後半～15世紀前半を中心として、大門町東部・大島町南部周辺における流通の拠点として機能していたと考えられる。

参考文献

- 青木一彦・井上都・久々忠義・宗融子・多賀令史 1998 「中世の放生津について」 『大境 第19号』
久々忠義・林寺巖州 1994 「射水平野の遺跡－神楽川流域を探る－」 『大境 第16号』
国立歴史民族博物館 1993 「日本出土の貿易陶磁－西日本編－」
大門町教育委員会 1997 「大門東部地区埋蔵文化財発掘調査報告－県営は場整備事業に伴う試掘調査報告－」
大門町教育委員会 1997 「二口遺跡発掘調査報告－町道本田土合線拡幅改良工事に伴う発掘調査報告－」
大門町教育委員会 1998 「二口遺跡発掘調査報告（2）－町道本田土合線拡幅改良工事に伴う発掘調査報告－」
大門町教育委員会 1998 「本田宮田遺跡発掘調査報告－熊野灘免農道造成工事に伴う発掘調査報告－」
富山県文化振興財團 1996 「梅原胡摩空遺跡発掘調査報告（遺物編）」
吉岡康暢 1991 「日本海域の土器・陶磁」 六興出版
吉岡康暢 1994 「中世須恵器の研究」 古川弘文館

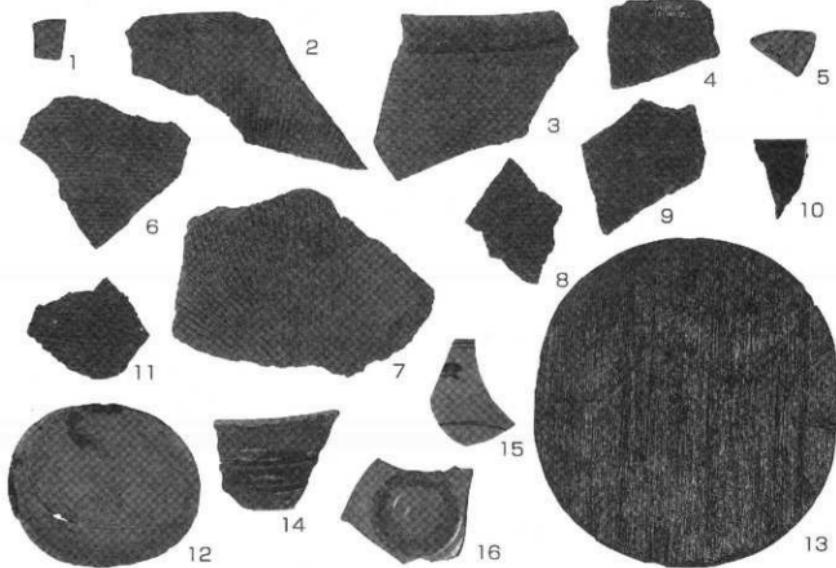


第1トレーンチ	作業風景
	基本層序
第2トレーンチ SE 1	第2トレーンチSE1 遺物出土状況
第2トレーンチ SE 3	

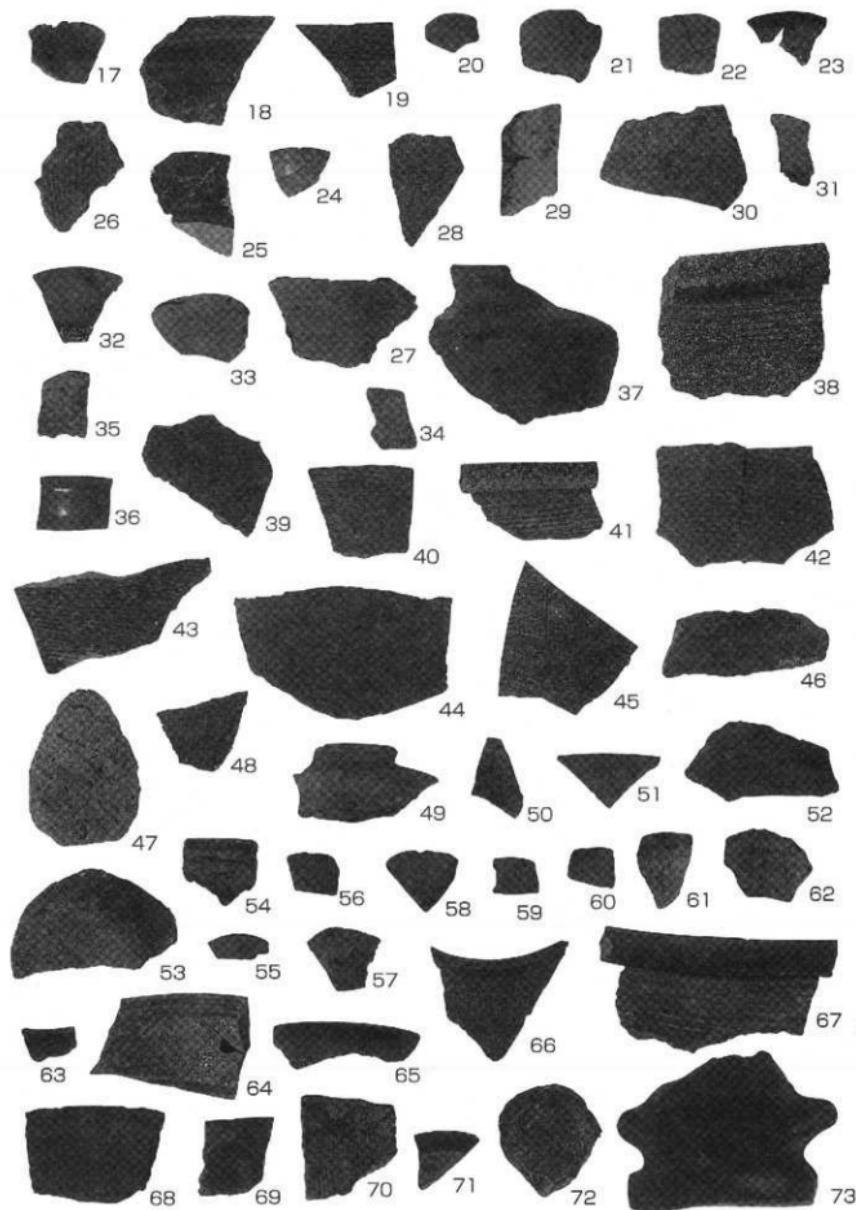
写真図版1



第2トレンチ SD12・13	第2トレンチSD7
第5トレンチ SD27遺物出土状況	



写真図版2 (遺物S=1/3)



写真図版3 (S=1/3、73は1/1)

報告書抄録

ふりがな	やすよしのせきはつくつちょうさほうごく						
書名	安吉遺跡発掘調査報告 一町道本田土合線拡幅改良工事に係る発掘調査報告—						
シリーズ名	大門町埋蔵文化財調査報告						
シリーズ番号	18						
編集者名	尾野寺克実						
編集機関	大門町教育委員会						
所在地	〒939-0294 富山県射水郡大門町二口1081 TEL0766-52-6964						
発行年月日	1999年3月						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °'\"	東経 °'\"	調査期間	調査原因
やすよし 安吉	だいもんまちやすよし 大門町安吉	市町村名	遺跡番号	163821	382050	36°43'07"	137°04'19"
						19981016 ～ 19981225	町道拡幅 改良工事に 伴う調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項	
安吉	集落	中世	井戸・溝	中世土師質土器・珠洲焼 瀬戸焼・越前焼・伊万里焼 木製品・土製品			

大門町埋蔵文化財調査報告 第18集

安吉遺跡発掘調査報告

町道本田土合線拡幅改良工事に係る第3次発掘調査報告

発行日 平成11年3月

発行 大門町教育委員会

編集 大門町教育委員会

印刷 獅立業社高岡

